

夢のあとさき その5

野球部は、昨年の4月から、平一小の学童保育の子供たちにボールゲームを通じて野球の普及活動と地域における人々の縦のつながりの育成に力を尽くしてまいりました。

ラグビー部は、ここ何年も昔から、地域の子供たちのところに向いてラグビーの楽しさや面白さを伝えるとともに、週に1度学校の体育館を開放し、地域の子供たちへの競技普及に努めてきたところです。

子どもの数がこんなに見る見るうちに少なくなるとは思ってもかけず、このような取り組みを今後も続けなければならないと肝に銘じているところです。

今、福島県では、新しい高等学校改革計画が立ち上げられ、その前期実施計画として、いわき海星高校（以前の小名浜水産）と小名浜高校の統合と、湯本高校と遠野高校の統合が進められております。

さらには、5年間の後、後期実施計画が発表される予定です。具体的な学校名はまだ明らかにされておきませんが、いくつかの統合高校の計画が発表されるはずで

す。県立高校の悩みは、この統合高校においても、最大規模が6クラス程度の規模になっていくだろうとの予測があり、学校の動きそのものもこじんまりとになってしまうのではないかという不安や、運営資金をどのように担保していくかという悩みと、教員数を減らさずに行く道はないかという課題があるのです。

一クラス減ると普通科においては、教員が2名程減じられます。3年間で6名の減です。つまり、1学年10クラス程度の学校が7クラスになると教員数は、18名が減らされ、大規模校でなくなることから、さらなる教員の減少や、養護教諭が2人から1人になるなど、事務職員も減じられることもあり、学校に教職員総数で、20人を大きく超える教員が減少します。

これでは、同じ数の部活動の活動を支えることもできなくなりますし、生徒の興味関心を丁寧に救える手立てもなくなります。

ちなみに単位制や総合学科においては、その学びの質から教員数が全日制普通科の数より10名ほど多くの教員が割り当てられるのです。

コース制や単位制にシフトする大きな意味はそこにあります。さらには中高一貫になると、中学校においても同程度の教員数が確保されますから、併せて約2倍程度の教員数となることは自明です。

学校における教育活動の原動力は活発な教員の活動ですので、そのことを担保できる制度設計が大きな要素になると考えます。

